



葉千労働動力

国鉄千葉動力車労働組合

〒260-0017 千葉市中央区要町2番8号(DC会館)
電話 (鉄電) 千葉2935・2939番
(公) 043(222)7207番
FAX 043(224)7197番

2001.1.26 No. 5258

会社と権力に身も心も売り渡した松崎 (東労組会長)

今こそJR総連と決別しよう

松崎が十二月九日、東労組全支部委員長会議で態度表明

JR総連革マルと革マル本体の対立・抗争は今年に入り、劇的臨界に達し、急速に崩壊の過程に突入している。革マル本体はJR総連に対し「JR総連は階級の敵」と言い、JR総連の革マルは「革マル(本体)は『社会の敵』、反社会的集団・オウムと同じだ」と罵倒している。この相互の罵りあいにはJR総連の分会組織まで巻き込んで自滅的泥沼状況をいつそう加速させている。こうした事態の中で卑劣にも沈黙し続けていた最高責任者の松崎がついに12月9日の東労組の全支部委員長会議で態度表明を行なうに到ったのである。その内容たるやどこをとっても怒りなしには語れない。会社と権力に身も心も売り渡し、あくまで会社と癒着し、甘い汁を吸い続けようとする松崎の醜悪な正体をさらけだしているのである。

組合費を革マル横流ししていた事を自認した松崎

(松崎) 革マルは私のことを「ブルジョアに完全に染まった組織の裏切り者」と言っている。私はかつて革マルの活動をやっていたが今は完全に手を切っている。革マルは脅かしに負けるような弱い組織

に潜り込むのが大変うまい組織である。革マルの攻撃から会社を守っていかう。

松崎はここで全面的に完全な革マル本体からの決別・離反を宣言している。これまでは革マルであったことを自白し、今は完全に「手を切った」「革マルであったことを恥じている」などと、権力と会社に向かつて恥ずかしげもなく売り込んでいたことが一切である」と強調している。第二の分割・民営化攻撃ともいえるべき「ニューフロンティア21」への全面協力を誓い、会社を守るためにどしどし労働者の首を切り、極限的な労働強化にも全面的に協力する。そのためにも動労千葉・国労解体を徹底的に推し進めると言っているのである。

ところでJR連合や国労の一部には「一連の騒動はJR総連による革マル派疑惑隠しと東労組の革マル組織を防衛するためパフォーマンスではないか」という見方が存在している。確かに革マルはこの間デマとペテン、窃盗と陰謀、暴力的恫喝等々を信条とし実行してきた党派である。まず疑って見るのは当然だろうが、今回の事態は全く違う。もし「パフォーマンス」だと

して、果たしてそれが革マルの組織防衛になるのかという全く逆だからである。自滅的な対立、抗争は多くの労働者人民からの一層の孤立を招き、過去の数々の反労働者の悪業に対する労働者の怒りの炎に革マル自身が油を注ぐ結果を招いている事実を見ても「パフォーマンス」と見るのは全くの誤りである。積年の怒りを爆発させ、速やかに解体・一掃に全力で立ちあがるのが求められているのである。

「革マルの攻撃から会社を守る」革マルと決別し会社、権力に庇護を懇願する松崎

(松崎) 私を組織に止めておけば、資金の提供も十分にしてもらえらると思ひ、我々に対抗するような新聞を投げ込んでいた。私を苦しめて楽しんでいるのだと思う。私は彼らの考えているようなことではないつもりだ。

松崎は「革マルが十分な資金提供を続けると強要している」と言っている。このことは、つい最近まで「手を切っていないから」ということでの自認であり、それどころかJR総連の組合員から徴収した組合費を革マルに「十分」提供してきたという事実を告白しているのである。松崎が革マルに渡してきた金はJ

R総連の公金である。この公金を革マルの資金として用立てし、数々の反労働者の行為の資金源としてきた松崎の罪と責任は、「手を切った」からと言ってすむ問題ではない。JR総連がJR会社と結託し、革マルの利権となってきた。これをJRと権力は完全に容認してきた。つまり国鉄労働運動総体を解体し、分割・民営化を強行するために支配階級は革マルを全面的に利用してきたということであり、松崎は自らの口でそれを証言したのである。松崎は、会社と権力の「使い捨て」に怯え、言ってはならない「過去」を洗いざらいさらけだし「革マルと手を切ったから見捨てないでくれ」と必死に懇願しているのだ。

だがもはや手遅れである。革マルの暴力的恫喝をバックにして存在してきたJR総連が、その革マル本体との自滅的全面的抗争の中で双方がもつれあいながら崩壊への坂道を駆けはじめているのだ。利用価値を全く失った松崎・JR総連革マルに誰が手を差しのべるといふのか! JR総連このようなみじめな末路へと追い込んだものこそ動労千葉をはじめ国労闘争団を先頭とする粘り強い闘いと団結の力である。

革マルと手を組むことで成立していたJRの労務政策、「結託体制」は破綻した。自信と確信を固め、一大反転攻勢にうつて出よう。